

# 1. 認知症高齢者の症状に対するイメージについて

## —認知症高齢者を家族にもつ学生とそうでない学生との比較—

○島崎 朱里（神鋼病院），井上 し乃（淀川キリスト教病院），松上 あすみ（西神戸医療センター），丸山 真実（兵庫県立尼崎病院），鈴木 千絵子（関西福祉大学看護学部）

### I. はじめに

わが国の核家族世帯は76.9%、三世帯世帯は18.8%であり（生労働省2010）、現代の若者は高齢者との同居経験や触れ合う機会が少なく、高齢者を理解することは日常的に困難な状況にあるといえる。そこで、認知症特有の症状を理解し学生が実習へ行ったときの不安感や困難感を少しでも軽減できるようにするために、認知症高齢者を家族にもつ学生とそうでない学生の認知症症状に対するイメージの相違を明らかにすることを目的として取り組んだ。

### II. 研究方法

1. 研究対象者：A 大学社会福祉学部（社会福祉学専攻）及び看護学部在籍中の3・4年生427名。
2. データの収集方法と分析：質問紙を用いたアンケート調査。学部および学年による認知症高齢者に対するイメージおよび知識の実態、認知症高齢者の家族の有無によるイメージおよび知識について、t検定、 $\chi^2$ 乗検定にて検討。統計ソフトはSPSS17.0 for windowsを使用。
3. 倫理的配慮：調査に対する参加の任意性やプライバシーの保護について説明。回収したデータは厳重に管理を行い、研究が終了した時点で速やかに破棄すること等を書面と口頭で説明し同意を得た。さらに関西福祉大学倫理委員会の承認を得て行った。

### III. 結果

回答者189名（回収率44.3%）のうち、家族に認知症高齢者がいる学生は49名（25.9%）いない学生は140名（74.1%）。認知症高齢者を家族にもつ学生とそうでない学生の両者がイメージしやすい症状は、「もの忘れ」（53.1%）「失語」（55.1%）であり正解率が半数を超えていた。症状問題では「記憶障害」（65.1%）と「周辺症状」（73.9%）の正答者率が高かった。両者がイメージしにくい症状は、記述問題の「失行」（34.7%）と症状問題の「失見当識」（46.9%）、また「失行」についての知識を問う問題の正解率が低かった（43.4%）。認知症高齢者を家族にもたない学生のみがイメージしにくい症状として、認知症高齢者を家族にもつ学生と、そうでない学生ではイメージに相違はみられなかった。興味と知識については、認知症高齢者を家族にもつ学生とそうでない学生において有意な差はみられなかった。しかし、記述問題では認知症高齢者を家族にもつ学生の正解率（47.7%）は、もたない学生（57.7%）より低かった。症状問題では認知症高齢者の家族の有無と得点に有意な差は認められなかった（ $P=0.867$ ）。認知症高齢者への興味は、看護学部と社会福祉学部間では有意な差は認められなかった（ $P=0.227$ ）。看護学部では3年より4年の方が興味が高かった（ $P=0.001$ ）。記述問題では、すべての問題で看護学部の4年の正解率（73.3~90.0%）が看護学部3年の正答者率（31.9~72.3%）よりも高く、症状問題においても看護学部の3年よりも4年の得点の方が有意に高かった（ $P=0.014$ ）。

### IV. 結論

看護学部の学年別で差があったことから認知症症状を教科書や講義だけでなく実際的に学ぶことの重要性和認知症症状についてリアルに感じられる機会をつくる必要があることが示唆された。